

# 琉球大学学術リポジトリ

## イリオモテヤマネコとツシマヤマネコの採餌生態と頭骨形態比較

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学21世紀COEプログラム 公開日: 2009-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中西, 希, 伊澤, 雅子, Nakanishi, Nozomi, Izawa, Masako メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/9885">http://hdl.handle.net/20.500.12000/9885</a>

PE-27 イリオモテヤマネコとツシマヤマネコの採餌生態と頭骨形態比較  
(Comparison of feeding ecology and skull morphology  
between Iriomote cat and Tsushima leopard cat)

中西 希・伊澤雅子  
(Nozomi Nakanishi and Masako Izawa)

琉球大学理工学研究科

イリオモテヤマネコ *Prionailurus bengalensis iriomotensis* は琉球列島に生息する唯一のネコ科動物であり、これまでの研究から小島嶼に個体群を維持できてきた理由として、西表島の動物相の豊かさがあげられている。また、イリオモテヤマネコの他にベンガルヤマネコの別亜種であるツシマヤマネコ *P. b. euphilura* が長崎県対馬に生息している。2 亜種共に生息地は島嶼であるが、その食性は大きく異なり、ツシマヤマネコは大陸に生息するベンガルヤマネコと同様に小型げっ歯類と食虫類を主な餌としているのに対し、西表島には在来地上棲小型哺乳類が存在しないため、餌動物をある分類群に偏ることなく様々な動物種を利用していることが糞分析からわかっている。このような生息地による食性変異は、その生息地の餌動物相によって大きく影響される。また、餌動物種のサイズや生態によってヤマネコの狩猟行動にも変化が現れることが予測される。そこで、本研究ではイリオモテヤマネコの在来地上棲小型哺乳類を欠いた小島嶼への適応を、同じ島嶼に生息するツシマヤマネコの食性や狩猟行動などの採餌生態と頭骨形態との比較から明らかにすることを目的とした。

これまで糞分析では把握できなかった食物中の各餌動物種への依存度と採餌咀嚼方法は、交通事故死亡個体の胃内容物を用いて分析した。またイリオモテヤマネコ 26 個体 (♂16, ♀10)、ツシマヤマネコ 28 個体 (♂12, ♀16) の頭蓋 47 形質、下顎 20 形質を計測し、2 亜種間の頭骨形態を、特に咀嚼に関する形態に注目し解析を行った。

両亜種ともに頭蓋と下顎に性的二型が確認された。また、両亜種間では、オスは頭蓋 31 形質、下顎 16 形質、メスは頭蓋 32 形質、下顎 18 形質で有意な差がみられ ( $p < 0.01$ )、頭蓋は咀嚼に関する形質全てを含むオス 25 形質、メス 28 形質で、下顎は雌雄共に全ての形質でイリオモテヤマネコの方が平均値が大きかった。側頭筋モメントアーム・下顎骨長比はツシマヤマネコが大きく、咬筋モメントアーム・下顎骨長比はイリオモテヤマネコが大きな値を示し、イリオモテヤマネコはツシマヤマネコと比べ顎関節の稼動に側頭筋よりも咬筋を使用していることが示唆された。胃内容物の分析からは、ツシマヤマネコが 2~3 分割して嚙下できる小型哺乳類や丸呑みできるカエル類を主に採餌していたのに対し、イリオモテヤマネコは大型のため複数回切断しなければ嚙下できないヘビ・トカゲ類や大型のカエル類を採餌していた。これらのことより、ツシマヤマネコは側頭筋により素早く鋭い犬歯を用い、動きの早い小型哺乳類を捕殺するのに対し、イリオモテヤマネコは捕らえた大型の餌動物を大きな裂肉歯によって咀嚼するため強く押し上げる咬筋がより発達したと考えられた。